

## ■ 書 評



### 新アルコール・薬物使用障害の診断治療ガイドライン

新アルコール・薬物使用障害の診断治療ガイドライン  
作成委員会 監修

樋口進, 齋藤利和, 湯本洋介  
編集

新興医学出版社

2018年9月 160頁

本体価格 5,200円+税

本書は、2002年に出版された「アルコール・薬物関連障害の診断・治療ガイドライン」の改訂版である。

表紙に、樋口進先生（日本アルコール関連問題学会・理事長）と齋藤利和先生（日本アルコール・アディクション医学会・理事長）のお名前が見える。精神科医であれば知らぬ者はいないであろう、わが国を代表するアルコール依存症研究の両巨頭である。世界的にも有名な、泣く子も黙る(?)お二人である。本書は、そのような重鎮お二人が関与されたガイドラインである。

読み進めていくと、最近のガイドラインの流行であるクリニカル・クエッション (CQ) 方式ではないことに気づく。CQ方式のガイドラインの場合、各CQの末尾に、いわゆるエビデンス・レベルの高い臨床研究の論文が、これでもかというほどに引用文献として列挙されている。本書においても、各項目ごとに文献が引用されているが、1項目あたり2~3文献の引用にとどまっている。免責事項（これがあるのは、最近のガイドラインの特徴かもしれない）によれば、「本ガイドラインはアルコール・薬物使用障害のエキスパートによるコンセンサスガイドラインであり、現時点での科学的エビデンスに基づく結論または推奨と必ずしも一致していない」とある。すなわち本書は、今時の数多のガイドラインとは一線を画する、エキスパート・コンセンサス・ガイドラインなのである。この分野は、多数例の患者群から得られたデータよりも、(ある程度の類型化はできるもの)患者の個別性による部分が大きいということであろうか? そのように考えると、後述するように、第2章の症例別初期対応編の存在が生きてくるように思える。

本書は、4つの章に分かれている。最初の章は、総論であり、診断基準、評価尺度、治療総論、疫学、法的事項や家族対応など、いわゆる教科書的な記述が続く。医学生や研修医、非専門医、コ・メディカルが読んで理解しやすい内容である。

第2章は「症例別初期対応編」である。内科や精神科でよくみるアルコール使用障害への初期対応、薬物依存症患者に対する初期対応、アルコール使用障害患者が救急受診した際の初期対応などの19のパターンについて、症例を元に、ポイントが箇条書きにされている。一般の内科医や、アルコールや薬物の使用障害を専門としていない精神科医にとっても役立つ内容であるが、何より救急外来で重宝されそうである。書評子の勤務する病院でも、ときおり夜間の救急外来にアルコール・薬物がらみの患者が来院することがある。多くの場合、書評子が夜中に起こされることになる。書評子の安眠のためにも、本書の第2章だけでも、救急外来に常備していただきたいとつくづく思う。

第3章は「軸評価に基づいた問題別対応編」である。重症度、社会的問題、身体的問題、精神的問題の4つの軸に分け、それぞれ基本知識や対応法が記載されている。最後の章は、参考資料で、全国の専門医療機関、回復施設、自助グループ相談先施設の一覧である。患者さんを紹介する際に役立つ内容である。

全体として約150頁とコンパクトにまとまっている。最初にどのあたりに何が書かれているのかを確認すれば、あとは必要な時に必要なところだけを読めばよいであろう。

先日、大企業（製造業）に勤めている知り合いの産業医から、アルコール依存症と思われる社員がけっこう多いので、本書を健康管理センターで購入したが、たいへんわかりやすく役に立っているという話を聞いた。医療機関以外でも活用する機会があるようだ。

最後に難点を挙げれば、B5判なので、白衣のポケットに入れて持ち運びができない。仕方がないので、救急外来、精神科外来、病棟に1冊ずつ置こうとすると、1冊5,200円+税なのでけっこうな出費である。（むしろそこが出版社の狙いか?）

(山田和男)